

作物名：トマト

病害虫名：青枯病（病原：*Ralstonia solanacearum*）



発生ほ場の様子



急性萎凋症状



導管褐変(上)と菌泥漏出(下)

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・ 外観上健全とみえた株が日中、急激に水分を失ったように茎葉の一部が萎れ、曇天日や朝夕は一時的に回復するが、その後、青枯れ症状のまま株全体が急激に萎凋し、最終的に枯死する。
- ・ 萎凋した株の地際部を切ると、維管束がやや褐変していることが多い。また、その断面から白濁した細菌泥がにじみ出ることがある。
- ・ 発病株は地際付近の茎から不定根の発生が認められる。
- ・ 簡易診断として、地際部の茎を水に浸け、断面から白濁した細菌泥が漏出することを確認する。

2 伝染源及び伝染方法

- ・ 本病菌は土壌中及び被害植物残渣で生存する菌が次作の伝染源となる。冬季は地表～深さ 20cm 前後での菌密度は低下するが、深層部では安定的に生存する。
- ・ 本病菌は土壌中で腐生的に存在し、植物が栽培されると根の傷や自然開口部から感染し、皮層や根の導管を通じて茎へ移行し、導管内で増殖し、水分通導機能を低下させ萎凋症状を引き起こす。
- ・ 発病株が伝染源となって、芽かき、誘引、摘葉などの管理作業の際に生じる傷口から病原菌が感染し、二次伝染を起こす。

3 発病・伝染好適条件

- ・ 本病菌は細菌の一種で、ラルストニア属に属する多犯性の病原細菌である。
- ・ 梅雨明け後の高温期に発生し、トマトをはじめナス科作物の連作ほ場で多発する。
- ・ 発病適温は 25℃以上であり、地温が 20℃以上になると急激に発病する。
- ・ 夏秋栽培では 5～9 月、半促成栽培では 5～7 月、抑制栽培では 7～9 月、越冬栽培では 9 月及び 5～7 月にかけて発生しやすい。
- ・ 地下水位の高いほ場や水分過多の条件は発病に好適である。

4 防除対策

- ・ 芽かき、誘引等の管理作業により罹病株の傷口から青枯病菌が感染するため、ケミクロン G(次亜塩素酸カルシウム溶液)等によるハサミの消毒や作業手袋を一定間隔で交換する。
- ・ 高温時には寒冷紗や白黒マルチなどによりハウス内の気温、地温の低下を図る。
- ・ 発病株は周囲の株の根を傷めないよう注意して根部とともに除去する。
- ・ 抵抗性台木の利用又は台木の抵抗性を強化した高接ぎ木栽培の導入を検討する。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全農教）、農業総覧原色病害虫診断防除編 2-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編 2（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影